

## 日本語の分裂文の統語特性

森山 倭成

神戸大学大学院生／日本学術振興会特別研究員

### 要旨

本論では、日本語における分裂文の統語構造について議論する。分裂文の派生には移動が関与していることが認知されており、先行研究では、この特性を捉えるために、空演算子移動分析と直接移動分析が提案されている。本論では、移動以外の統語特性に目を向ける。特に、(i) コピュラの構造位置、(ii) 前提節の構造、(iii) 焦点要素の構造位置について考察を加える。コピュラの構造位置については、TP の下位にとどまると論じる。前提節の構造については、前提節に丁寧語が現れることから、「の」は、CP を補部にとることができることを主張する。焦点要素については、焦点移動は起こさず、CopP の補部にとどまることを示す。それらの議論に基づいて、直接移動分析よりも空演算子移動分析の方が妥当であると結論付ける。

### 1 はじめに

本論では、日本語の分裂文の統語構造について議論する。日本語の分裂文は、「の」で導入される前提節、焦点要素、そしてコピュラの「だ」・「である」から構成される。(1) では、「虫が出てきたのは」が前提節 (presuppositional clause) として、「タンスの中から」が焦点 (focus) として現れている。焦点要素は、(1) で *gap* と表記されている空所と同一の指標を持つ。

(1) [虫が *gap*<sub>i</sub> 出てきたのは] タンスの中から<sub>i</sub> {だ／である}。

日本語の統語論研究においては、分裂文の派生に移動が関与することから、移動の特性を説明することに主眼が置かれてきた。先行研究では、前提節内での空演算子の移動を仮定する空演算子移動分析と前提節内からの焦点要素の抜き出しを仮定する直接移動分析の 2 つの分析が提案されている。移動特性に関わる議論が多くなされている一方で、分裂文の他の統

---

\* 本稿は、関西言語学会第 46 回大会 (2021 年 6 月、オンライン開催) における口頭発表と博士論文第 4 章の内容に基づいています。ご指導を賜った指導教員の岸本秀樹先生に深く御礼申し上げます。そして、建設的かつ大変有益なコメントを数多く頂いた査読者と編集委員会の先生方に心より感謝申し上げます。また、本稿の執筆に際し、貴重なコメントを頂いた野口雄矢氏と中野晃希氏にも謝意を表します。もちろん、本稿に残された不備や誤りの責任はすべて筆者にあります。本研究は JSPS 科研費 JP19J20008 の助成を受けています。

語特性については議論の余地が残されているように思われる。本論では、(i) コピュラの構造位置、(ii) 前提節の統語構造、(iii) 焦点要素の構造位置に着目し、日本語の分裂文は、(2) に示されるような構造を持つと提案する。

$$(2) [CP [CP OP_i [CPOLITEP [TP \dots t_i \dots] C_{POLITE}] no]-wa_k [TP t_k [VP t_k [VP [COP_P t_k [COP' FOCUS-de]] V] ar] u] C] \\ \underbrace{\hspace{15em}}_{-da}$$

まず、コピュラの「である」や「だ」は、TP の下位に基底生成され、その位置にとどまる。より具体的には、*-dear* は CopP・VP・vP の主要部に対応する要素であり、「だ」は「である」の縮約形として音声的に実現する。Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) は、コピュラの「だ」が CP 領域に基底生成されると主張している。時制要素の接続と伝聞の「そうだ」の接続のテストから、コピュラが CP 領域に基底生成されているのではないことを指摘する。次に、前提節の統語構造について論じる。先行研究では、前提節を導く「の」の補部は TP であるとされる。しかしながら、丁寧語の埋め込みが可能であることから、本論では、「の」は丁寧語を認可する投射の C<sub>POLITEP</sub> を補部に選択できると主張する。最後に、焦点要素が CopP の補部に生起することを論じる。Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) は、焦点要素が FocP の指定部に焦点移動するとしている。しかし、不定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語・小節に関わるデータから、焦点移動の仮説は妥当でないことが示される。

本論の議論は、以下のように進める。2 節では、分裂文の派生に移動が関与することを確認し、先行研究で提案されている空演算子移動分析と直接移動分析を概観する。3 節では、分裂文のコピュラが TP の下位にとどまることを示す。4 節では、前提節を形成する「の」が C<sub>POLITEP</sub> を補部に取りれることを示す。5 節では、焦点要素の構造位置について考察を加え、焦点要素は CopP の補部にとどまると論じる。6 節はまとめである。

## 2 空演算子移動分析と直接移動分析

本節では、分裂文の派生に関わる分析を概観する。Hoji (1987, 1990) が論じているように、分裂文では、移動の制約の違反が観察される。(3) において、焦点要素の「タンスの中から」は、島を形成する複合名詞句内に含まれる空所 (*gap*) と同一の指標を持つが、この文は不適格である。このことから、分裂文の派生に移動が関与していることが示唆される。<sup>1</sup>

(3) \*太郎が [[虫が *gap* 出てきた]日を] 覚えているのはタンスの中から<sub>i</sub>{だ/である}。

空演算子分析によれば、(3) の非文法性は、空演算子 (OP) が前提節内での移動を起こすことによって生じる (Hoji 1990; Matsuda 1998; Kizu 2005)。(4) は前提節の構造を示しており、TP 内から空演算子の OP が CP 指定部へと移動する。(3) では、空所位置にある OP が複合名詞句から抜き出されることになるので、複合名詞句違反によって非文となる。

(4) [CP OP<sub>i</sub> [TP \dots t<sub>i</sub> \dots] の-は]

<sup>1</sup> ただし、焦点要素に格助詞や後置詞が付かない文では、必ずしも島の制約が観察されない (Hoji 1987, 1990; Kizu 2005)。本論では、移動の制約の違反が観察される格助詞・後置詞付きのデータのみを扱う。

i. [*gap*<sub>i</sub> 訪れた] 人が幸せになれるのはあの島<sub>i</sub> {だ/である}。

他方、直接移動分析では、空演算子は仮定されておらず、焦点要素自体が空所位置から焦点位置に直接的に移動する。Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012) によると、分裂文は、(5a) に示されるような「のだ」文を基底構造とする (Tatsumi (2013) も参照)。「の」は FinP の主要部、「だ」は FocP の主要部であると仮定されている。「だ」の FocP 主要部分析は、Ono (2006), Kuwabara (2013), Maeda (2014), 西垣内 (2016), Takahashi (2006, 2020), 遠藤・前田 (2020) などのさまざまな文献で採用されているため、影響力の強い分析であると考えて差し支えない。

- (5) a. [<sub>FocP</sub> [<sub>FinP</sub> [TP 虫がダンスの中から出てきた] の] だ]  
 b. [<sub>FocP</sub> タンスの中から<sub>i</sub> [<sub>FinP</sub> [TP 虫が<sub>t<sub>i</sub></sub> 出てきた] の] だ]  
 c. [<sub>TopP</sub> [<sub>FinP</sub> [TP 虫が<sub>t<sub>i</sub></sub> 出てきた] の-は]<sub>j</sub> [<sub>FocP</sub> タンスの中から<sub>t<sub>j</sub></sub> だ]

(5b) の段階では、焦点要素の「ダンスの中から」が FocP 指定部への焦点移動 (focus movement) を受ける。さらに、(5c) に示されるように、FinP の「虫が出てきたの」が FocP の上位に投射する TopP 指定部への題目化 (topicalization) を起こすことによって、「虫が出てきたのはダンスの中からだ」のような分裂文が形成される。この分析に従うと、(3) の例文が非文となるのは、焦点要素が空所の位置から FocP の指定部に移動する際に、島を形成する複合名詞句を飛び越えることになるからであるということになる。このように、移動の制約の違反に関するデータは、空演算子分析と直接移動分析のどちらでも説明可能である。このため、移動に関わるデータからだけでは、いずれの分析が妥当であるかを確定させることはできない。本論では、移動の制約とは関係を持たないデータから、直接移動分析の問題を指摘する。

### 3 コピュラの構造位置

本節では、コピュラの「だ」と「である」の構造位置について考察する。丁寧語との比較から、「だ・である」が CP の主要部でないことを示す。まず、コピュラの構造位置について論じる前に、丁寧語の統語特性について考察を加える。丁寧語には CP に基底生成されるものと CP に移動するものの 2 種類がある (Miyagawa in press)。(6a, b) のように、名詞述語や動詞述語の肯定文では、丁寧語は TP の下位に生起し、主要部移動を起こして CP に移動する (Miyagawa 1987; Kishimoto 2013)。一方で、(6c) の形容詞文や (6d) の否定文では、丁寧語は CP に基底生成されると考えられる。本論では、説明の便宜上、(6a, b) における丁寧語を丁寧語 A、(6c, d) における丁寧語を丁寧語 B と呼ぶ。

- (6) a. 太郎は来ます。 b. 太郎は学生です。  
 c. 太郎は賢かったです。 d. 太郎は来なかったです。

丁寧語に 2 種類が存在するという仮説は 2 つのデータから裏付けられる。まず、過去時制を表す「た」の接続は、(7a, b) のように、丁寧語 A では可能であるが、(7c, d) のように、丁寧語 B では不可能である (辻村 1967)。

- (7) a. 太郎は来ました。 b. 太郎は学生でした。  
 c. \*太郎は賢かったでした。 d. \*太郎は来なかったでした。

時制要素の「た」を TP の主要部であると仮定すると、丁寧語 A は TP の下位に基底生成されるため、「た」の左隣に現れるということが出来る。一方で、丁寧語 B が CP に基底生成され

ると考えると、TP の主要部は CP を補部を取れないので、(7c, d) は不適合となると言える。

次に、伝聞の「そうだ」への埋め込みの可否から、丁寧語 A・B が CP に関係付けられることを確認する。伝聞の「そうだ」は補部に TP を取る。このため、(8a) のように、時制要素に接続できるのに対し、(8b) のように、CP の主要部である「だろう」や「よ」には接続できない（「だろう」や「よ」が C 主要部である点は、Kishimoto (2013) を参照）。

- (8) a. 太郎が来たそうだ。 b. \*太郎は本を読む {だろう / よ} そうだ。

そうすると、CP に基底生成される丁寧語 B は、伝聞の「そうだ」の補部に表出できないことが予測される。実際、(9) のように、丁寧語 B は「そうだ」の補部に生じ得ない。

- (9) a. \*太郎は賢かったですそうです。 b. \*太郎は来なかったですそうです。

さらに、丁寧語 B のみならず、(10) のように、丁寧語 A も伝聞を表す「そうだ」の補部位置に生起できない。このことは、丁寧語 A が CP との関係を持つことを示している。

- (10) a. \*太郎は本を読みましたそうです。 b. \*太郎が犯人でしたそうです。

これらの言語事実に基づいて、本論では、丁寧語 A は、(11a) に示されるように、TP の下位に基底生成され、CP に移動すると仮定する。丁寧語 A の移動のタイプについては、顕在的統語部門における移動を想定する（丁寧語 A の移動に伴い、時制要素の「た」も顕在的に移動する）。伝聞を表す「そうだ」の補部は TP なので、丁寧語 A の移動先となる CP が提供されず、(10) は非文となる。一方、丁寧語 B では、(11b) のように、CP に基底生成される。<sup>2</sup> このため、丁寧語 B は、時制要素や伝聞の「そうだ」の接続を許容しないのである。

- (11) a. [CP [TP ... mas/-des...] -mas/-des] b. [CP [TP .....T] -des]

<sup>2</sup> (i) に示すように、丁寧語は他の CP 主要部（例えば、終助詞の「か」）とも共起可能である。

- i. 遠足は楽しかったですか。

このことは、日本語の CP 領域が多重の投射から構成されていることを示唆している。森山 (To appear) は、(ii) に示す五階建ての階層構造を提案している。SRP (Soliciting Response Phrase) には、聞き手への応答要求の機能を表す「ね・な」が現れる。EP (Emphasis Phrase) には命題内容の強調を表す「よ」が現れる。ForceP は節のタイプ（平叙文・疑問文・命令文など）の指定に関与し、疑問を表す「か」が現れる。MP (Modal Phrase) は話し手の認識的モダリティに関与する投射 (Koizumi 1993) であり、想起を表す「っけ」が主要部に起こる（「だろう」も MP の投射に起こる）。AddrP は聞き手の属性や聞き手との関係の指定に関わり、丁寧語 A・B がこの投射との関係を持つ（丁寧語 A は Addr に移動する）。

- ii. [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP [TP .....] です] っけ] か] よ] ね・な]

これに関連して、Miyagawa (In press) は、本論で丁寧語 B と呼んでいる「です」は Modal Phrase の主要部であると主張している。しかしながら、「山田先生って昔あんなに学生に甘かったですっけ」のように、「です」は MP 主要部の「っけ」と共起できる。このため、丁寧語 B は MP の要素ではない。

また、Miyagawa (2017) は、CP よりも上位の Speech Act Phrase に丁寧語が主要部移動するとしている。この分析に対する反論については、森山 (To appear) を参照。

本論の目的は、分裂文の統語構造を考察することであり、分離 CP 構造に関連する問題は本論の主旨ではないため、これ以上深く立ち入らない。

このように、時制要素の接続のテストは、丁寧語が基底生成される構造位置を特定するのに有効である。また、伝聞を表す「そうだ」の埋め込みのテストは、ある要素が CP との関係を持つかどうかを確認するのに有効である。

ちなみに、査読者の一人も指摘しているように、丁寧語 B は形容詞型の活用語が含まれる文においてのみ生起できる。<sup>3</sup> (12a, b) では、丁寧語 B が動詞述語や名詞述語を含む肯定文に現れており、不適格である（ただし、方言差があり、例えば、長崎方言では容認される）。一方で、(12c, d) のように、動詞述語や名詞述語を含む否定文では生起可能である。(12c, d) が容認可能となるのは、否定要素の「ない」が形容詞型の活用語であることによる。

- (12) a. ?\*太郎は来たです。                      b. ?\*太郎は学生だったです。  
c. 太郎は来なかったです。                      d. 太郎は学生ではなかったです。

一般的に、否定要素の統語範疇は形容詞ではなく Neg であるとされる。このことは、補部に現れる要素の統語範疇ではなく、形態的な活用によって丁寧語 B の生起の可否が決まることを示している。補部に現れる要素の統語範疇は丁寧語 B の生起条件とは無関係である。

また、2名の査読者が指摘しているように、「のです」文（「のだ」文の丁寧体）においては、(13a, b) のように、形容詞型の活用語の有無に関係なく、時制要素の右方に丁寧語の「です」が生起できる。ただし、この場合の「です」は丁寧語 B ではなく、TP の下位に基底生成される丁寧語 A である。このことは、(13c, d) のように、時制要素の「た」が「です」に接続できることから容易に確認できる。Hiraiwa & Ishihara (2012) は、「のだ」文は単一節構造を有するとしているが、時制要素の接続が可能であることから、複文構造を持つと考えられる。<sup>4</sup> (13) に現れる「です」は、丁寧語 B ではないので、形容詞型の活用語は必要ないのである。

- (13) a. 太郎は来たのです。                      b. 太郎は学生だったのです。  
c. 太郎は来たのでした。                      d. 太郎は学生だったのでした。

時制要素の接続と伝聞を表す「そうだ」の埋め込みのテストを用いることで、分裂文のコピュラが CP ではなく、TP の下位の構造位置にあることが確認できる。(14) から見て取れるように、コピュラの「だ」と「である」には時制要素の「た」が接続できる。このことから、コピュラは TP の下位に基底生成されていると考えるのが妥当である。「だ」の FocP 主要部

<sup>3</sup> 2 種類の丁寧語が存在することには言語変化が関係している。「ます」と「です」の語源には諸説あるが、いずれも動詞に起源があるとされる（日本国語大辞典第 2 版編集委員会 (2000-2002) など）。丁寧語 A の「です」や「ます」は、時制要素が後続できることから分かるように、形態的にも動詞の活用を保っている。一方で、丁寧語 B の「です」は、時制要素の右隣に生起することから分かるように、丁寧語 A 「です」の文法化が進んだもので、動詞の特性を完全に失っていると考えられる。丁寧語 A がより古い型であり、丁寧語 B が新規の型であるということになるであろう。

<sup>4</sup> 「のだ」文は時制要素の接続のテストだけでなく、伝聞を表す「そうだ」の埋め込みのテストにも合格する。(i) のように、「のだ」文は「そうだ」の補部に現れることができる。(i) は、コピュラの「だ」が CP との関係を持たないことを示している。

i. 太郎が来たのだそうだ。

仮説では、「だ」は CP に生成されるとされるが、そのような仮説では (14) を説明できない。

(14) 太郎が出てきたのはあそこから {だっ/であっ} た。

また、「だ」は TP の下位に基底生成されるが、主要部移動によって CP に動く可能性もある。この可能性は、(15) のデータから排除される。(15) では、コンピュータの「だ」と「である」が伝聞の「そうだ」の補部に現れている。「だ」や「である」が CP 領域に移動するのであれば、伝聞の「そうだ」の補部位置には表出できないはずである。実際のところは、補部に表出できるので、「だ」と「である」は TP の下位にとどまっているということが出来る。

(15) [太郎が出てきたのはあそこから {だ/である}] そうだ。

時制要素の接続と伝聞の「そうだ」の補部への埋め込みのテストは、いずれも、「だ」と「である」が CP の主要部ではないことを示唆している。本論では、コンピュータの構造として、(16) に示す [vP [VP [CopP ...]]] の三階建ての構造を立てる。

(16) [TP [vP [VP [CopP  $\underbrace{-de_{Cop} V -ar_v}_{-da}$  -uT]]]]

Cop は主語と述語の叙述を成立させる働きを有する機能範疇である。「で」は CopP の主要部として現れる。*-ar* は通常の動詞であると見て、分離動詞句仮説に基づき、V-v に対応する主要部とみなす。また、Nishiyama (1999) に従って、「だ」は「である」の縮約形であると仮定する。*-dear* が「で」と *-ar* に分解されるのは、(17) に見られるように、「で」と *-ar* の間に取り立て詞（ここでは「は」）を挿入することが可能であるからである。取り立て詞は、「東京大学は」と \*東京は大学の対比が示しているように、語の右端に挿入され、語の内部には挿入され得ない。(17) が容認されることは、「で」と *-ar* が異なる語であることを示している。

(17) たしかにお金が出てきたのはあそこからではあった。

Nishiyama (1999: 188) は、「である」文に現れる *-ar* は、時制要素を支えるために現れるダミーコピュラ (dummy copula) であると論じている。しかし、そのような仮定では、(18) のデータを説明できない。(18) では、*-ar* の直後に取り立て詞の「は」が挿入されている。この例では、時制要素の「た」を支えているのは、「は」の直後に現れている代動詞の「する」である。

(18) たしかにお金が出てきたのはあそこからでありはした。

(18) は、*-ar* が時制要素を支えるために起こる要素ではないことを示している。このため、本論では、*-ar* をダミーコピュラであるとは仮定しない。通常の動詞と同じように、二重の動詞句を形成する要素であると仮定する。「ある」はダミーコピュラではなく、「お金がある」のような文に現れる「ある」と同じように、状態動詞として動詞句に生起する。

また、Nishiyama (1999) は、「で」を PredP の主要部であるとしている。この仮説は、Bowers (1993) の PrP 仮説を日本語のコピュラ文の構造に応用したものである。Bowers (1993: 595) によれば、Pr は主語と述語の叙述を成立させる働きを持つ機能範疇である。(19) に示されるように、PrP の指定部には主語に相当する NP、補部には述語 XP が現れる。

(19) [PrP NP (subject) [Pr Pr XP (predicate)] X = {V, A, N, P}

しかしながら、日本語の「で」が現れる文では、「で」の補部に述語相当の句が現れるとは限らない。「A は B である」という形式を持つコピュラの叙述文では、B が述部であり、A が

その項となる。Bowers (1993) の PrP 仮説に基づけば、A は PrP の指定部、B は補部に起こることになる。一方で、査読者の一人が指摘するように、「A は B である」という形式を持つ分裂文の場合は、A に含まれる変項の値を B で指定することになる。言い換えると、分裂文においては、A が述部に相当し、B が主語に相当する。そうすると、述部が補部に現れる Bowers の PrP 分析では、日本語の分裂文における叙述を捉えられない可能性がある（ただし、Tatsumi 2013 も参照）。叙述に関わる機能範疇については、PredP・PrP 以外に RP (Relator Phrase) が提案されている (den Dikken 2006)。Relator とは、主語と述語の叙述を仲介する抽象的な機能範疇である。(20) に示されているように、Relator が投射する RP の指定部と補部には主語と述語が置かれる。ここで重要なのは、主語と述語が置かれる構造位置が予め指定されていない点である。Bowers (1993) の分析では、主語が PrP の指定部に現れ、述語は PrP の補部に現れるのに対して、主語と述語の構造位置が指定されないのが RP 仮説の骨子である。

(20) a. [RP [XP SUBJECT] [R' RELATOR [YP PREDICATE]]] (Predicate-complement structure)

b. [RP [XP PREDICATE] [R' RELATOR [YP SUBJECT]]] (Predicate-specifier structure)

さらに、den Dikken (2006) は、Relator を抽象的な機能範疇 (*abstract functional head*) であると仮定している。Bowers (1993) の Pr は、T や C などの他の機能範疇とは異なる独立した機能範疇である。他方、Relator は、T やコピュラ、P、Top など様々な機能範疇が現れるプレースホルダーとしての役割を持つ。RP は抽象的な機能範疇であるとされているので、日本語に RP が存在するかどうかについては、より広範に主述関係を考察する必要がある (Harada (2016) は、RP 仮説を採用し、「で」を RP の主要部であると想定している)。少なくとも、「で」の補部には、述部に相当する要素のみならず、分裂文の焦点のように、(述部ではなく) 項に相当する要素が現れることができる。本論では、RP と同じように、CopP は、叙述の方向性が予め定まっていなかった句であると規定する。CopP は、(21) における両方の構造を取れる。

(21) a. [CopP [XP SUBJECT] [Cop' [YP PREDICATE] COP]]

b. [CopP [XP PREDICATE] [Cop' [YP SUBJECT] COP]]

PrP 仮説では、叙述の方向性がはじめから定まっているため、分裂文のように、主述関係が逆転するようなケースは適切に捉えられない可能性がある。CopP は叙述に関わる句であるという点では PrP・PredP と共通しているが、叙述の方向性が決まっていなかったという点で異なる。

また、Kizu (2005) は、「で」を後置詞句 (PP) の主要部であるとしている (Nakayama (1988) も「で」を後置詞であるとしている)。Kizu (2005: 55) によると、分裂文に現れる「で」は場所・理由・目的を表す後置詞の「で」と同一の形態素である。ところが、以下のような文を容認する話者が存在することから、この分析は、必ずしも妥当とは言えない可能性がある。

(22) a. ?太郎が読んだのはその本をである。 b. \*太郎が校庭をで走った。

(22a) では、分裂文の焦点に「その本を」という対格付きの名詞句が現れている。この文の容認度に関しては、個人差があることが知られているが、(22a) のような文を容認する話者にとっても、(22b) のような文は容認不可能である。(22b) では、対格標示されている名詞句に

場所を表す後置詞の「で」が直接後続している。<sup>5</sup> (22b) が容認不可能なのは、主格や対格のような構造格は後置詞の直前に現れることができないからである。「である」の「で」が PP の主要部なのであれば、(22a) はどのような話者にとっても容認不可能と判断されるはずである。ところが、実際には (22a) を容認する話者は一定数存在するので、「である」文に起こる「で」を後置詞であるとみなすことはできない。

以上、本節では、コンピュータの「だ」と「である」は共に TP の下位にとどまる要素であることを示した。*-dear* は Cop-V-v に対応する主要部であり、また、Nishiyama (1999) に従って、「だ」は「である」の縮約形であると論じた。

#### 4 前提節の統語構造

本節では、前提節の統語構造について議論する。先行研究では、前提節を導入する「の」は TP を補部にとるとされる (Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012; Kizu 2005 など)。しかし、丁寧語の埋め込みに関するデータから、「の」が CP を補部に取れることが確認できる。

(23a) では丁寧語 A の「ます」、(23b) では丁寧語 A の「です」が分裂文の前提節に生起している。3 節で論じたように、丁寧語 A は CP 領域に主要部移動する要素なので、「の」節には丁寧語の移動先となる投射が存在しているといえることができる。

- (23) a. 山田先生が登場されますのはあちらの扉からです。  
b. 私がいつも気がかりでしたのはそのことについてです。

本論では、前提節は、(24) の構造を持つと提案する。Murasugi (1991) や Kizu (2005) に従い、「の」は CP の主要部であると仮定する。また、前提節において、空演算子 (OP) の移動を仮定する。主要部の「の」は、丁寧語の認可に関わる  $C_{POLITE}P$  を補部にとる。丁寧語 A の「ます」や「です」は、TP の下位から  $C_{POLITE}$  への主要部移動を起こす。Hiraiwa & Ishihara (2012) などのカートグラフィーの枠組みに基づく日本語の CP 研究では、「の」は FinP の主要部であると仮定されることがある。Rizzi (1997) によれば、FinP は文の定性 (finiteness) に関わる投射であり、CP 領域の最下位に位置付けられる。しかし、「の」は丁寧語の認可に関わる  $C_{POLITE}P$  を補部にとることができるので、CP 領域の最下位に存在する投射ではないことが窺える。

- (24) [ $CP$   $OP_i$  [ $C_{POLITE}P$  [ $TP$  山田先生が  $t_i$  登場され  $t_j$ ] ます]] の-は

「の」の補部を CP と表記せず、 $C_{POLITE}P$  と表記しているのは、「の」が丁寧語以外の CP 領域の主要部に接続できないからである。(25) は、CP 主要部であるモダリティ要素の「だろう」や終助詞の「よ」が前提節に生起できないことを示している。このように、「の」節に現れることのできる CP 領域の要素は丁寧語に限られるため、 $C_{POLITE}P$  と表記している。

<sup>5</sup> 動詞の「走る」は自動詞であるが、(i) のように、経路を表す名詞句に対格を与えることができる。

i. 太郎は校庭を走った。

ブルツィオの一般化 (Burzio 1986) によれば、外項を選択する動詞のみが名詞句に対格を付与することができる。「走る」は非能格自動詞であることから、外項を選択する。このため、(i) において、「校庭」の対格標示が可能となるのである (長谷川 1999: 76)。



(25) \*太郎が登場する {だろう / よ} のはあそこからだ。

また、丁寧語であっても、「です」については、「です」という形態のままでは前提節に現れることができない。(26a) では丁寧語 A の「です」、(26b) では丁寧語 B の「です」が前提節に表出しているが、不適格である。

(26) a. ?\*私がいつも気がかりですのはそのことについてです。

b. \*太郎が出てこなかったですのはそのビルからです。

この不適格さは、連体形接続の節に「です」が現れることができないという形態的な要因による。連体形接続となる「場合」節では、(27a) に示されるように、「です」という形態では表出できない。同様に、(26) において、分裂文の前提節は連体形接続なので「です」は生起できないのである。一方で、(27b) のように、時制要素の「た」が現れれば生起できる。同様に、(23b) のように、過去時制の「た」が現れれば分裂文の前提節に生起できる。

(27) a. \*雨です場合、試合は中止です。      b. 雨でした場合、試合は中止です。

丁寧語 A は活用をするので、(23b) のように、時制要素の「た」を付けることで前提節に表出させることができる。しかし、3 節で示したように、丁寧語 B には時制要素の「た」は付けられないので、前提節に表出させることはできない。(26) は、形態的な要因で不適格となっているので、(26) の不適格さは本論の仮説にとっての問題とはならない。

分裂文では、「の」は C<sub>POLITE</sub>P を補部に選択する一方で、「のだ」文では、「の」は C<sub>POLITE</sub>P ではなく、TP を選択する。(28) のように、「のだ」文では、丁寧語の埋め込みが容認されない。(28a) では「ます」、(28b) では「です」が前提節に現れているが、どちらも非文である。

(28) a. \*山田先生があちらの扉から登場されますのです。

b. \*私はそのことについていつも気がかりでしたのです。

(28) の観察に基づいて、「のだ」文の「の」は、(29) に示されるように、TP を補部にとり仮定する（「だ」・「である」の構造は分裂文と同一である）。

(29) [CP [TP 山田先生があちらの扉から登場される] の]

直接移動分析では、「のだ」文から分裂文が派生される。しかし、「のだ」文の「の」は TP を補部にとり取るのに対し、分裂文の「の」は C<sub>POLITE</sub>P を補部にとり取る。直接移動分析では、「のだ」文の「の」と分裂文の「の」は同一の統語的振る舞いをするのが予測される。しかしながら、実際には、「のだ」文と分裂文の「の」は補部選択に関して相違が見られるので、「のだ」文の「の」と分裂文の「の」を同一視することはできない。<sup>6</sup> 分裂文と「のだ」文における丁寧語の埋め込みに関する差異は、直接移動分析にとって問題となる。以上のように、移動以外の統語特性を考慮に入れると、直接移動分析には問題があることが分かる。空演算子移動

---

<sup>6</sup> 「の」は、分裂文の前提節や「のだ」文以外に、知覚動詞などの埋め込み節や女性の文体においても観察される。(ia) のように、埋め込み節を形成する「の」節には丁寧語は表出しない一方で、(ib) のように、終助詞の「の」では丁寧語の表出が可能である。これらの例から、CP 主要部として現れる「の」には、C<sub>POLITE</sub>P を補部にとり取るものと TP のみを補部にとり取るものがあることが窺える。

i. a. \*太郎は花子が走っていますのを見ました。

b. 昨日六本木に行きましたのよ。

分析では同様の問題が生じないので、空演算子移動分析の方が説明力が高いと言える。

本論の議論を終える前に、分裂文における焦点化の問題について論じる。Hiraiwa & Ishihara (2012) の分析においては、FocP の指定部へ移動した要素が焦点解釈を受けることになる。一方で、本論の分析では、焦点要素自体は移動せず、かわりに前提節内において空演算子の移動が起こる。そうすると、査読者の一人が指摘するように、焦点要素が焦点化の対象になることがどのように保証されるかに関して問題が浮上する。本論では、焦点-前提の関係は「の」節内で予め作り上げられると想定する。(30) は、「の」節の構造を示している。空演算子移動は A' 移動であるから、談話情報に関与する移動であると考えられる。分裂文における空演算子は焦点化の指定に関与する [focus] 素性を担う要素であると想定する。

$$(30) \quad [CP \text{OP}_{[focus]i} \quad [C_{POLITE}P \underbrace{[TP \dots t_i \dots]}_{presupposition} ] C_{POLITE}] \text{no}]$$

*focus* *presupposition*

(30) のように、[focus] 素性を担う空演算子は CP の指定部に移動する。移動後に、空演算子はそれが C 統御する TP と焦点-前提の関係を結ぶ<sup>7</sup> (丁寧語は発話行為に関わるため、命題の真偽には関与しない。このため、C<sub>POLITE</sub>P は前提に含まれない)。さらに、空演算子 OP は叙述を介して、音形を持つ焦点要素と同一であることが保証される (空演算子と焦点要素が叙述を介して同定される点については、Hoji (1990: Ch. 5, 75) や Kizu (2005: 36) を参照)。音形を持つ焦点要素そのものは [focus] 素性を持たないが、「の」節内の空演算子と同定されることで、焦点化の対象であることが保証されるのである。Hiraiwa & Ishihara (2012) の分析では、音形を持つ焦点要素自体が FocP 指定部に移動することで焦点化が起こる。一方で、本分析では、[focus] 素性を担う音形を持たない演算子が「の」節内で焦点-前提の関係を構築し、その後、音形を持つ焦点要素と同定されることで、焦点化が起こることになる。

## 5 焦点要素の構造位置

本節では、焦点要素の構造位置について考察を加える。焦点要素の構造位置を特定するために、不定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語・小節に関わるデータを提示する。それら四つのテストに基づき、焦点要素は Cop の補部にとどまると論じる。

まず、不定代名詞束縛に関する事実から、焦点要素が CP 領域ではなく、CopP 内に存在することを示す。不定代名詞は、「も」や「か」などの要素によって C 統御されなければならない (Kishimoto 2001; Hiraiwa 2005)。(31a) では、不定代名詞の「誰」は、CP を作用域に取る取り立て詞の「も」によって束縛され、否定極性表現の解釈を受ける。一方で、(31b) では、「誰」が主節主語として現れているが、「も」の作用域内に現れていないので、非文となる。

(31) a. 彼は [誰が来た] も言わなかった。 b. \*誰が [彼が来た] も言わなかった。

分裂文においても、不定代名詞の束縛は可能である。(32) では、不定代名詞の「どちら」が焦点に含まれている。

<sup>7</sup> 「の」節内で焦点-前提の関係が結ばれるのならば、「の」節を前提節と呼ぶのは、厳密には不適切であるが、説明の便宜上、「...のは...だ」の形式における「の」節を前提節と呼んでいる。

(32) 太郎が出てきたのは [どちらのビルからで] もなかった。別のビルからだった。

束縛子の「も」は「で」に後続しているので、CopPをC統御していると考えられる。焦点要素に含まれる不定代名詞が容認されることは、分裂文の焦点要素が「も」の作用域となるCopP内に現れることを示している。本論では、焦点要素は、(33)に示されるように、Copの補部として現れていると仮定する。(33)の網掛け部分は、束縛子の作用域を表している。

(33) [TP[NegP [VP [VP [CopP [CopP [Cop' FOCUS -deCop]] -moPrt] V] v] nakatNeg] -taT]

FocPの指定部に焦点要素が移動するとする直接移動分析では、焦点要素に含まれる不定代名詞の束縛が容認されないはずである。(34)に示されるように、FocPは「も」の束縛領域外に投射するからである。このため、不定代名詞束縛に関する事実は、直接移動分析にとって問題となる(移動の痕跡は不定代名詞束縛の対象とならない(Kishimoto 2001))。

(34) [FocP FOCUS [TP[NegP [VP [VP [CopP [CopP [Cop' FOCUS -deCop]] -moPrt] V] v] nakatNeg] -taT] Foc]

焦点要素がCopP内に存在することは、「も」の等位接続に関するデータからも支持が得られる。一般に、等位接続詞は、構成素同士を接続する働きを持つ。焦点要素がCopの補部に存在しているのであるとすると、焦点要素と「で」は構成素をなすので、等位接続が可能であることが期待される。予測通り、(35)は文法的である。焦点要素の「あちらのビルから」・「そちらのビルから」と「で」が構成素をなしていることがこの例から窺える。

(35) その有名人が出てきたのは [あちらのビルからで] も [そちらのビルからで] もない。  
(35)において等位接続されるのは、(36)に示すように、CopPである(網掛け部分は等位接続を受ける構成素を表す。なお、スペースの関係で片方の等位項のみを表示している)。

(36) [TP[NegP [VP [VP [CopP [CopP [Cop' FOCUS -deCop]] -moPrt] V] v] naNeg] -iT]

一方で、焦点移動分析では、焦点要素はFocP指定部に位置付けられる。そのような分析では、(37)のように、焦点要素はCopPの外部に現れ、「で」とは構成素をなさないことになるので、(35)の事実に反して、不適格となることが予測される。

(37) [FocP FOCUS [TP[NegP [VP [VP [CopP [CopP [Cop' FOCUS -deCop]] -moPrt] V] v] naNeg] -iT] Foc]

ここまでの議論では、「である」文のデータに基づいて、焦点要素はCopの補部に置かれると論じてきた。しかしながら、Hiraiwa & Ishihara (2002, 2012)では、「だ」文のデータに基づいて、焦点要素の焦点移動仮説が提案されている。このため、「だ」文ではFocP指定部に移動している可能性もある。以下では、主格主語に関するデータから、コンピュータのタイプに関係なく、焦点要素はCopPの補部に現れることを確認する。分裂文の主語は、題目の「は」で標示されることが一般的であるが、主格の「が」で標示されることも可能である(特に名詞修飾節で「が」格標示が容認されやすい)。(38a)では、主語にあたる前提節が「が」で標示されている。(38a)のように、「が」格主語が焦点要素の「あのビルから」の左側に現れる語順では許容されるが、(38b)のように、反対の語順では許容されない。

- (38) a. その有名人が出てきたのがあのビルから {だっ/であっ} た可能性  
b. \*あのビルからその有名人が出てくるのが {だっ/であっ} た可能性

本論では、「が」格で標示された主語はTP指定部に移動すると想定する(Kishimoto 2001など)。そうすると、(38)の線形順序から、主格主語の右隣に現れる焦点要素は、TPより下位に

あることが示唆される (cf. Hasegawa 1997)。直接移動分析では、焦点部に置かれる要素は FocP 指定部にあるはずなので、TP 指定部にある前提節より左側に現れることが予測される。つまり、(38b) の文が容認可能であると誤って予測される。一方で、焦点要素が CopP の補部にとどまるとする本節での提案に基づくと、(38a) が容認されることは当然の帰結である。CopP は TP の下位に投射する句であるからである。焦点要素は、(39) のように、CopP の補部に起こると考えるのが妥当である。このように、「である」文であるか「だ」文であるかにかかわらず、焦点要素は CopP の補部に現れるのである。

$$(39) \quad [TP \ [vP \ [VP \ [CopP \ FOCUS \ \underbrace{-de_{Cop} \ V}_{-da} \ -ar_v] \ -u_T]]]$$

不定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語に関するデータは、いずれも焦点要素が CopP 内にあることを示唆しているが、これらのデータだけでは、焦点要素が CopP の指定部に存在する可能性を排除することはできない。最後に、分裂文の焦点要素が CopP の指定部に起こるのではないことを小節に関わる言語事実に基づいて示す。日本語では、(40a) のように、「A を B にする」という形式を持つ小節構文が観察される (Kikuchi & Takahashi 1991; Sakai et al. 2004)。この形式を持つ小節は、CopP に相当すると考えられる。まず、(40b) に見られるように、論理主語は主格では標示され得ない (竹沢・Whitman 1998: 50)。標準的な分析では、日本語の主格は TP の主要部により認可されると仮定されている (Takezawa 1987)。そうすると、(40b) は、小節に TP が欠如しているため、非文となるということができる。

- (40) a. 太郎は [花子を受付係に] した。      b. \*太郎は [花子が受付係に] した。  
c. \*太郎は [花子を明日受付係に] した。

さらに、(40c) のように、時制を修飾する副詞の「明日」は小節内に生起できない。「明日」は時制を修飾するので、TP を修飾先とすると考えられる。<sup>8</sup> 小節内に TP が投射されないと考えると、(40c) が不適格となるのは、「明日」の修飾先が存在しないからであると言える。異なる分析の可能性として、(40b) の主格の認可や (40c) の「明日」の修飾が不可能になるのは、小節は TP を持つが、非定形節となっているためであると考えられないわけではない (Sode 1999)。しかし、この可能性は否定辞の生起に関するデータから排除できる。Zanuttini (1996) は、NegP が生起するための生起条件として、NegP は TP が投射する時にのみ投射するという一般化を提示している。小節では TP が欠如していると想定すると、Zanuttini (1996) の一般化から、Neg 主要部に現れる否定要素は小節に生起し得ないことが予測される。小節において、否定辞の生起の可否を確認すると、(41) のように、予測通り、不適格となる。

- (41) \*太郎は [花子を受付係でなく] した。

<sup>8</sup> 査読者の一人が指摘するように、(i) では、小節の論理主語と述語との間に「明日」を置くことができる。これは、主節の述部が非過去時制（「る」）を表すことによる。「明日」は小節ではなく、主節の時制を修飾するので生起可能である。(40c) で重要となるのは、小節が時制を持つかどうかという点であるから、主節の時制を過去時制にした上で、小節内における「明日」の生起の可否を確かめている。

i. 太郎は [花子を明日受付係に] する (つもりだった)。

非定形の TP が投射するのであれば、否定辞が生起しても問題ないはずである。(42) のように、非定形節を導入する不定詞の *to* が現れる文では、*not* の生起が可能である。小節に非定形の TP が投射するのであれば、(41) は適格となることが予測される。(41) が容認されないことから、本論では、小節では TP が欠如していると想定する。

(42) John tried not to smile.

小節には、否定要素のみならず、動詞も現れることができない。(43) では、動詞句を投射する「ある」が現れているが、容認されない。

(43) \*太郎は [花子を受付係であり] した。

小節内には動詞句は投射しないので、小節構文に現れる「に」を「であり」の縮約形であるとみなすことはできない。「A を B に」という形式を持つ小節は、(44) のように、CopP に相当すると仮定する。「に」は CopP の主要部に基底生成される。古語において、現代日本語の「である」に対応する表現は、「にあり」である。「に」は動詞「あり」の直前に現れているので、「である」の「で」と同じように CopP の主要部に置かれると考えられる。(44) の構造では、叙述に参与する構成素が XP と YP に起こる（叙述の方向性は予め定まっていない）。

(44) [<sub>CopP</sub> XP-ACC [<sub>Cop'</sub> YP -*ni*<sub>Cop</sub>]] *si-ta*

小節構文では、(45) に示しているように、分裂文の埋め込みが可能である。(45) では、前提節の「ゲストが登場するの」と焦点の「あちらの扉から」が現れている。このことは、前提節は CopP の指定部、焦点は CopP の補部に位置付けられることを示している。前提節は CopP の指定部に生じるので、分裂文の焦点が CopP の指定部に生じるとは考えられない。

(45) そのディレクターは [<sub>CopP</sub> ゲストが登場するのを [<sub>Cop'</sub> あちらの扉から-に]] した。

さらに付け加えると、この事実は、主節に現れる分裂文の前提節が CopP の指定部に基底生成されることを示唆する。述語内主語仮説によると、主語は、TP 指定部ではなく、述語が投射する句の内部に基底生成される。分裂文の前提節が小節内に現れることができることから、前提節は (46) の構造において、CopP の指定部に基底生成されることができると考えることができる。

(46) [<sub>CP</sub> [<sub>CP</sub> OP<sub>i</sub> [<sub>CPOLITEP</sub> [<sub>TP</sub> ...<sub>i</sub> ...] ] <sub>CPOLITE</sub> ] *no*]-*wa*<sub>k</sub> [<sub>TP</sub> <sub>tk</sub> [<sub>VP</sub> <sub>tk</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>CopP</sub> <sub>tk</sub> [<sub>Cop'</sub> FOCUS-*de*]] ] *V*] *ar*] *u*] <sub>C</sub> ]  
前提節がガ格で標示される時、前提節は時制が持つ EPP の素性により TP 指定部に移動する。また、題目の「は」でマークされる時は、CP の指定部に題目化移動する (Kishimoto 2009)。なお、前提節は <sub>vP</sub> 指定部を経由して上位の投射に移動すると仮定する (Chomsky 2001)。

以上、本節では、焦点要素が CopP の補部に現れることを示した。加えて、前提節が派生の初期段階では CopP 指定部に導入され、その後上位の投射に移動することを論じた。

## 6 まとめ

本論では、日本語の分裂文の統語構造について議論した。まず、時制要素の接続と伝聞を表す「そうだ」の接続が可能であることから、分裂文におけるコピュラの「だ」と「である」は、TP の下位にとどまることを示した。次に、丁寧語の埋め込みが可能であることから、日本語の前提節は、<sub>CPOLITEP</sub> を選択可能であると主張した。最後に、不定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語・小節に関わるデータから、焦点要素は、CopP の補部にとどまると論じた。

分裂文研究では、分裂文の派生に移動が関与することから、空演算子移動分析と直接移動分析が提案されている。本論では、移動以外のデータに目を向けることで、直接移動分析では説明できない言語事実が見つかることを指摘した。

## 参考文献

- Bowers, John. 1993. The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24(4), 591–656.
- Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Reidel.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*. 1–52. MIT Press.
- den Dikken, Marcel. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. MIT Press.
- 遠藤喜雄・前田雅子. 2020. 『カートグラフィー』 開拓社.
- Harada, Masashi. 2016. Japanese pseudoclefts. *Kansas Working Papers in Linguistics* 37, 59–75.
- Hiraiwa, Ken. 2005. *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. Doctoral dissertation, MIT.
- Hiraiwa, Ken & Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and “no da” construction in Japanese. Tania Ionin, Heejeong Ko & Andrew Nevins (eds.) *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research*. 35–54. MITWPL.
- Hiraiwa, Ken & Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15(2), 142–180.
- Hasegawa, Nobuko. 1997. A copula-based analysis of Japanese clefts: *Wa*-cleft and *ga*-cleft. In Kazuko Inoue (ed.) *Grant-in-Aid for COE Research Report (1): Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, 15–38. Kanda University of International Studies.
- 長谷川信子. 1999. 『生成日本語学入門』 大修館書店.
- Hoji, Hajime. 1987. Japanese clefts and reconstruction/chain binding effects. Paper presented at WCCFL 6.
- Hoji, Hajime. 1990. Theories of anaphora and aspects of Japanese syntax. Ms., University of Southern California.
- Kikuchi, Akira & Daiko Takahashi. 1991. Agreement and small clauses. Heizo Nakajima & Shigeo Tonoike (eds.) *Topics in Small Clauses*. 75–105. Kurosio Publishers.
- Kishimoto, Hideki. 2001. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32(4), 597–633.
- Kishimoto, Hideki. 2009. Topic prominence in Japanese. *The Linguistic Review* 26(4), 465–513.
- Kishimoto, Hideki. 2013. Notes on correlative coordination in Japanese. Yoichi Miyamoto, Daiko Takahashi, Hideki Maki, Masao Ochi, Koji Sugisaki & Asako Uchibori (eds.) *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito*. 192–217. Kaitakusha.
- Kizu, Mika. 2005. *Cleft Constructions in Japanese Syntax*. Palgrave Macmillan.

- Koizumi, Masatoshi. 1993. Modal phrase and adjuncts. *Japanese/Korean Linguistics* 2, 409–428.
- Kuwabara, Kazuki. 2013. Peripheral effects in Japanese questions and the fine structure of CP. *Lingua* 126, 92–119.
- Maeda, Masako. 2014. *Derivational Feature-Based Relativized Minimality*. Kyushu University Press.
- Matsuda, Yuki. 1998. A syntactic analysis of focus sentences in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 31, 291–310.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. LF affix raising in Japanese. *Linguistic Inquiry* 18(2), 362–367.
- Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. MIT Press.
- Miyagawa, Shigeru. In press. Syntax in the treetop. Ms., MIT.
- 森山倭成. To appear. CP 領域における主要部要素の配列と分離構造. 『神戸言語学論叢』 第 13 号.
- Murasugi, Keiko. 1991. *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Nakayama, Mineharu. 1988. Empty copulas. *Mita Working Papers in Psycholinguistics* 1, 121–128.
- 日本国語大辞典第 2 版編集委員会. 2000-2002. 『日本国語大辞典第 2 版』 小学館.
- 西垣内泰介. 2016. 「指定文」 および関連する構文の構造と派生. 『言語研究』 150, 137–171.
- Nishiyama, Kunio. 1999. Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8(3), 183–222.
- Ono, Hajime. 2006. *Investigation of Exclamatives in English and Japanese: Syntax and Sentence Processing*. Doctoral dissertation, University of Maryland.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*. 281–337. Kluwer.
- Sakai, Hiromu, Adrian Ivana & Chao Zhang. 2004. The role of light verb projection in transitivity alternation. *English Linguistics* 21, 348–375.
- Sode, Rumiko. 1999. *On the So-called Small Clause Constructions in Japanese*. Doctoral dissertation, The Ohio State University.
- Takahashi, Daiko. 2006. Apparent parasitic gaps and null arguments in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15(1), 1–35.
- Takahashi, Daiko. 2020. Derivational argument ellipsis. *The Linguistic Review* 37(1), 47–74.
- Takezawa, Koichi. 1987. *A Configurational Approach to Case Marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- 竹沢幸一・John Whitman. 1998. 『格と語順と統語構造』 研究社.
- Tatsumi, Yuta. 2013. A smuggling approach to Japanese cleft construction. *JELS* 30, 348–354.
- 辻村敏樹. 1967. 『現代の敬語』 共文社.
- Zanuttini, Raffaella. 1996. On the relevance of tense for sentential negation. Adriana Belletti & Luigi Rizzi (eds.) *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*. 181–207. Oxford University Press.

# Syntactic Properties of the Cleft Construction in Japanese

Kazushige Moriyama

Graduate student, Kobe University/JSPS Research Fellow

## Abstract

This paper seeks to determine the structural organization of the cleft construction in Japanese. To this end, this paper addresses the following three points: (i) the structural position of the copulas *-da* and *-dearu*, (ii) the syntactic structure of the presuppositional clause, and (iii) the structural position of the focus of the cleft construction. It is first shown, based on data concerning the tense element *-ta* ‘PST’ and the hearsay evidential *sooda* ‘I hear,’ that the copulas occupy a structural position lower than TP. More specifically, *-de* is the head of CopP and *-ar* projects verb phrase, while *-da* is a contracted form of *-dearu*. Then, it is shown that the complementizer *-no*, which forms the presuppositional clause, can C-select  $C_{\text{POLITE}P}$ , to which addressee-honorific markers, such as *-masu* and *-desu*, are raised. Finally, drawing on data from indeterminate pronoun binding, *mo*-coordination, nominative subjects, and small clauses, it is argued that the structural position of the focus element is the complement of CopP.

In previous studies, much attention was paid to the property that the derivation of the cleft construction involves movement. Two different hypotheses have been proposed to account for the property: the null operator hypothesis and the direct movement hypothesis. The null operator hypothesis posits that a null operator moves into Spec-CP in the presuppositional clause (Hoji 1990; Kizu 2005). In the direct movement hypothesis, on the other hand, the focus element is extracted from the presuppositional clause and directly moves into Spec-FocP (Hiraiwa & Ishihara 2002, 2012). The data presented in this paper indicate that the null operator hypothesis is to be preferred over the direct movement hypothesis.